

第2回 舞台芸術科（仮称）設置検討協議会

議 事 録

- 1 日 時 平成30年1月25日（木）
午後4時00分～6時00分
- 2 場 所 神奈川県教育委員会 委員会会議室
- 3 出席者 能祖 將夫 荒木 正 稲童丸 克己
久我 肇 近藤 建吾 田中 俊穂
堀江 信夫 眞野 純 （敬称略）

1 開会

(事務局)

定刻になりましたので、ただ今から第2回舞台芸術科（仮称）設置検討協議会を始めさせていただきます。県立高校改革担当課長の宮本と申します。よろしくお願いいたします。早速ですが、前回所用により御欠席された構成員の方を御紹介させていただきます。県中学校文化連盟演劇専門部会の部会長でございます、横浜市立舞岡中学校校長の稲童丸克己様でございます。続きまして、本日より御参加いただく構成員の方がいらっしゃいますので御紹介させていただきます。四季株式会社執行役員技術部長近藤建吾様でございます。近藤様の御参加により、本協議会は9名の構成で進めてまいります。よろしくお願いいたします。なお、本日、鶴嶺高等学校の川端校長は御欠席でございます。それでは、これからの議事につきましては、進行を能祖会長にお願いいたします。

2 議事

会長（能祖構成員）

それでは、始めます。議事に入る前に、「会議公開の可否について」です。本日は、基本コンセプト及び教育内容の検討が議題となっておりますが、協議は原則として公開したいと考えております。なお、未成熟な情報を含む議論が展開され、非公開とすることが望ましい場合には、非公開とさせていただきたいと思っておりますがいかがでしょうか。

(賛成の声)

はい、ありがとうございます。それでは、協議を原則として公開して行うことといたします。

本日は2つ議題がございますが、まず、基本コンセプトについてです。それでは、基本コンセプトについて事務局から説明をお願いします。

(事務局)

資料1と2を御覧いただきたいと思います。前回、12月26日に基本コンセプトについて御議論をいただきました。12月26日に基本コンセプトとしてお示しさせていただいたのは資料1でございます。それに対しまして、前回の御議論を踏まえてワーキンググループでも議論させていただき、修正を加えたのが資料2でございます。まず、コンセプトの順序ですが、前回と順序を変えております。学科の基本コンセプトですので、新たな学科でこういった人材を育成していくのかということが一番上に掲げさせていただきました。次にこういった力を身に付けさせるのかというこ

とで整理をさせていただいております。まず、修正後の1でございますが、前回お示した番号で申し上げますと3です。前回は、舞台芸術を通した、様々な芸術を理解する、幅広い教養を身につけた人材の育成、ということでお示しをしました。前回の議論の中で、幅広い教養に加えて、芸術的なセンスですとか表現力などを磨くことのできる教育、実社会でも役に立つ教育が必要ではないかという御議論をいただきまして、そのことを踏まえ、今回最初にお示しをしようということで整理をさせていただいております。読ませていただきますと、舞台芸術を通した幅広い教養や芸術的センスを身に付けた創造性豊かな人材の育成、と整理をさせていただいております。前回、様々な芸術を理解するという言葉を入れさせていただいたのですが、舞台芸術を通した、という言葉に加えて様々な芸術としますと、芸術の分野があまりにも幅広になっていくということもございまして、その言葉を外した上で、舞台芸術を通して幅広い教養を身に付けていく、または芸術的センスを身に付けた上で創造性豊かな人材を育成していこう、ということで整理をさせていただいております。次に、身に付けさせたい力として、コミュニケーション能力を挙げさせていただいております。前回の御議論の中で、コミュニケーション能力には二面あるというお話がございました。グローバル社会を見据えた、自己表現を通じたコミュニケーション能力というものと、他者と協働して舞台を作り上げていくといった時に必要なコミュニケーション能力というもの、二面あるのではないかという御議論をいただきました。前回は、複数の人間で協力して1つの作品を作り上げる演劇活動を通した、ということで整理しておりましたが、前回の議論を踏まえまして、文部科学省において、コミュニケーション能力の育成に必要な要素を整理したものがございましたので、その文言を①から④に整理をしてまとめさせていただいたのが2でございます。読ませていただきますと、①として、自分とは異なる他者を認識し、理解すること。こちらは一般的に他者理解と言われるものに繋がるかと思えます。②として、他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること。こちらは自己理解に繋がっていくのかと思えます。③として、集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと。こちらが前回お示した、複数の人間で協力して1つの作品を作り上げる、ということに繋がると思えます。そして④として、対話やディスカッション、身体表現等を通じて自己を表現すること。こちらが自己表現ということになるかと思えます。これらの要素で構成される演劇活動等を通してコミュニケーション能力を育成していく、ということで2として掲げさせていただいております。次に3として、演技、舞台技術、企画・制作等の理論から実践までの指導を通じた幅広い演劇教育。こちらは新たな学科でどういった教育をしていくのかという議論に繋がるかと思えますが、こちらを3としています。前回は2にお示しをしていたものです。前回と少し違うのは、最初の部分、演技、舞台技術、それから前回も議論がございましたけれども、企画や運営、こちらを企画・制作という言葉でまとめておりますけれども、そうした演劇に関わる部分から最後に舞台として作り上げて演じるまで、一貫した部分を理論から実践まで通じたという形でまとめさせていただいております。4以降は大きく前回と変更ありませんが、4は舞台

芸術との出会いの場でございます。前回は1に掲げさせていただいておりました、カッコで本物の芸術との出会い、と記載させていただいておりました。その後ワーキングで議論していく中で、舞台芸術との出会いの場という言葉自体が二面あるのではないかと、1つは、質の高い芸術を観る、本物の芸術に触れるという出会い、というものと、もう1つは経験のない生徒さんでも、この学科に来て舞台芸術を初めて学ぶ、という意味合いがあるのではないかということです。実は、他県のコンセプトの中にも同じような出会いの場という表現があるのですが、他県の場合ですと、初めて舞台芸術を学ぶという意味合いで使っておりました、ここは御議論いただければと思いますが、二面あるのではないかということがございましたので、あえてカッコで本物の芸術との出会いというところだけを特出しするのではなく、二面あるという認識を持った上で、舞台芸術との出会いの場、という言葉で整理をさせていただいております。5は変更しておりません。6は、前回、大学などの教育機関との連携を入れてはどうかという御提案をいただきましたので、下線を引かせていただいておりますが、大学などの教育機関と追記させていただいております。7は、前回も必要性についてはお話をいただきましたが、この学科以外の高校全体にこの学科における学びによる教育効果を普及させていくということで、7も変更しておりません。以上、項目数は7つで変更ございませんが、少し構成とまとめ方を変えて整理をさせていただいておりますので、この部分について、まず、御議論をいただければと思います。よろしくお願ひいたします。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。本来はワーキンググループでの議論があつて私たちの議論、今回だけ順番が逆になっておりますけれども、今回は私たちの議論の後にワーキンググループでの議論があつて、それを反映させてここに改定案が出てきております。今、御説明がありましたが、資料2の1、そもそもの大目標、どのような人間を育てるのかというところですか。資料1の3、資料2の1、ここに関して御意見・御質問がありましたらお願いします。大学では、特に1年生は、昔でいうところの教養課程というように、教養科目をやっていくというのが大きい考え方だと思うのですが、高校教育の中で教養教育というのは元々あるのでしょうか。

（田中構成員）

教養教育という言い方はしませんが、知識・技能の修得というのが学ぶべき学力の最初にくることですから、そこに含まれるのではないかと思います。

会長（能祖構成員）

では、幅広い教養を身に付けていくという言い方に違和感はないと考えてよいですか。

(田中構成員)

舞台芸術に当てはめれば、知識・技能がこういう表現になってくるのかなと思います。

会長（能祖構成員）

わかりました。それから、芸術的センスというのが前回の会議で出て、これが採用されているということと、舞台はクリエーションがある程度大きいことになっていくと思うので、創造性という言葉が入っているということですよね。人材の育成、大学では人間形成という言い方も結構するのですが、人材の育成という言い方でよろしいでしょうか。

(荒木構成員)

おそらく多くの高校で、学校の目標等でも人材の育成という言葉が使われています。

会長（能祖構成員）

そうですか。では、1についてはよろしいでしょうか。

(賛成の声)

では、2についてです。最近では、演劇というとすぐにコミュニケーション能力に繋がるというようになっていきますけれども、コミュニケーション能力とは何かというところで、国の定めるところを丁寧に追って行って、というところで今新しい案が出ているかと思うのですが、2についてはいかがでしょうか。

(堀江構成員)

質問してもよろしいでしょうか。国の審議経過報告から採用した言葉でよくわからないのは、③の集団を形成し、というのは、これはどういう意味で使われているのかなと。文字面だけ見ると少し無理を感じたものですから。これについて御存知の方に教えていただけるとありがたいのですが。

会長（能祖構成員）

私の理解は、舞台芸術というのは、決して一人ではできないということが大きな特徴です。つまり、小説は一人で書けるし、絵も一人で描けるし、詩も一人で書ける。けれども、舞台は、仮に一人芝居であろうが、ソロダンスであろうが、他者と協働していく。つまり集団の中でモノをつくっていくということ。それが大きな特徴なので、ここであえて集団という言い方をしたのかと想像していたのですが、どうでしょうか。

(事務局)

参考資料1を御覧ください。この資料は前回もお示ししておりますけれども、同じものを参考資料1として付けさせていただいております。その中の一番下の(4)コミュニケーション能力の捉え方とその育成のひとまる目に、コミュニケーション能力を、という記載がございまして、人間関係やチームワークを形成し、合意形成を図っていく、あるいは課題解決していく能力のことをコミュニケーション能力として位置づけているようでございます。おそらくこのチームワークを形成しという意味合いで、その下の③に集団を形成しという記載がございしますが、ただいま会長からお話があったように、一人ではそういった活動をするのは難しい、ある程度集団を形成した中で、他者との協調、協働を図っていくという意味合いで、チームワークという言葉でもいいのかもしれませんが、それを国では、「集団を形成し」という言葉でまとめているのかと理解しております。

(堀江構成員)

単純に集団を形成し、というとグループを作って、仲間内だけでやっているようなマイナスのイメージがあるのです。前回、お示しいただいた、複数の人間で協力して1つの作品を作り上げる、というような表現は残してもいいのかなと思います。集団を形成し、というと、一部で、数人で集まってやるというイメージを持ってしまうような嫌いもあるかなと思っておりまして、そこがこの字面だけからすると少し違和感があるのです。

会長(能祖構成員)

身内感というか、内にこもる感じということですか。

(久我構成員)

まとめ方の問題なのかもしれないのですが、①から④までの要素で構成される演劇活動等を通したコミュニケーション能力の育成ということですから、集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと、こういうことを通してコミュニケーション能力を育成していきましょうということ、演劇活動というのはこういう要素があって、こういう活動を通して能力を育成していきましょうというまとめ方になっていると思いますので、このまとめ方としてはそんなに違和感はないのですが、どう表現するかということでしょうか。

会長(能祖構成員)

他の方はどうでしょうか。

(田中構成員)

久我さんがおっしゃったように、私も内容は良いと思います。言葉をもし変えるのであれば、チーム作りと共に、というようにした方が、多くの方がわかりやすい

という意味ではチーム作りというような言い方でもよいのかもしれませんが。内容は、集団形成というのも1つのコミュニケーション能力の育成の場としては重要であるかと思います。

会長（能祖構成員）

言葉のニュアンスというか、印象ですよ。

（堀江構成員）

はい。正しく伝わればそれで構わないです。

会長（能祖構成員）

このことに関して他に何か御意見はありますか。集団の中でとした方がよいでしょうか。チームの中で、いってみれば座組みということですよ。自分がいて、他者がいて、複数人間がいて、ということですよ。

（堀江構成員）

集団の中でといえば、おそらく意味が通るかだと思います。

会長（能祖構成員）

必要な役割を持つ集団の中で、として、照明とか、音響とか、役者とか、それぞれの役割があって、その集団の中で他者と協調していく、といったような表現にした方がよいのか。それともただ、集団の中で、といった方がよいですか。

（田中構成員）

前回のも素敵な言葉なのです。複数人間で、という。

会長（能祖構成員）

複数人間で協力して、という言葉にすると他者との協調、協働と意味が重なってしまうのですよ。複数人間との協調、協働が図られる活動を行うこと、ということでしょうか。どうでしょうか。集団の中で、とした方がよいでしょうか。

（久我構成員）

集団の中で、というシンプルな方がわかりやすいと思います。

会長（能祖構成員）

よろしいですか。では、集団の中で、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと、とします。2に関して他に御意見はございますか。よろしいですか。では、3ですけれども、演技、舞台技術、企画・制作等の理論から実践までの指導を通じた幅広い演劇教育。ここはそんなに変更の修正の必要はないでしょうか。

(眞野構成員)

幅広ければ幅広いほどいいので、このままでいいと思います。

会長（能祖構成員）

3はよろしいでしょうか。では、4、ここが少し変更した部分なのですがすけれども、本物の、という部分がとれたのですね。先程事務局から説明がありましたように、初めて演劇と出会う生徒も多々いるということなので、舞台芸術と出会っていくということと、鑑賞者として、第一級の、第一線の舞台芸術と出会っていくということと、両方の意味合いを兼ねているということです。本物の芸術との出会いとしてしまうと、鑑賞者のことに寄りすぎているかというところで、演劇自体と出会う、舞台芸術自体と出会うという意味も含めておくということかと思いますが、こちらについては、いかがでしょうか。

(稲童丸構成員)

私は前回出席できなかったので議事録を読ませていただいたのですが、私も少し触れさせていただいた舞台の裏側の制作過程の稽古場の雰囲気とかそういったことも含めてということもこちらに入ってくるのかと思いますので、プラスされて良かったなと思います。

(近藤構成員)

本物という言葉が何に掛かるかというのは、先程おっしゃっていたように非常にわかりにくいのかなと思いましたので、資料2に書いてあるように舞台芸術との出会いというシンプルな表現の方が、むしろ具体的なように感じます。

(眞野構成員)

私も同感です。

会長（能祖構成員）

よろしいですか。では、4はよろしいでしょうか。

(賛成の声)

5、6、7のうち6に大学が追加されたということですが、5、6、7あるいは全体を通してもう一回見直したところ、新たにこういうことも追加したらどうだろうか、あるいはここはいらぬのではないかと、ということも含め、御意見があれば伺いたいと思いますがいかがでしょうか。これでよろしいでしょうか。

(賛成の声)

それでは、そのようにさせていただきます。ありがとうございました。次に（２）教育内容についてです。それでは、事務局から御説明をお願いします。

（事務局）

資料の３と資料の４を使って御説明させていただきます。まず、資料３を御覧ください。この後、教育内容について御検討をいただくため、たたき台ということで資料３を御用意しております。まず、１検討にあたっての基本的な考え方です。後ほど御説明させていただきますが、この部分はあまり異論のない部分なのかと思いつつ事務局でまとめておりますので、御確認をいただいて、もし何かあれば御意見いただければと思います。まず（１）ですが、内容を検討するにあたって、今、御議論をいただきました基本コンセプト、これを踏まえた内容にしていかなければならない、ということで、４つポツを記載しておりますが、今、御検討いただいた内容を踏まえて教育内容を検討していただく、ということになるかと思えます。

（２）ですが、これからどういう学校にこの学科を置いていくかということはもちろん検討しなければならないのですけれども、実際にどういう学校でということ限定せずに、高校には学年制と単位制の学校がありますが、学年制というのは１年生、２年生、３年生と学年を追って一定程度のまとまりのある教育を、ある程度固まった形で進んでいく、進行していく学校です。一方、単位制というのは、色々な科目を用意して、生徒が自分の興味・関心があるもの、あるいはより専門的知識を身に付けていきたいものを選択して学んでいくという学校です。まだ、学年制の学校にするのか、単位制の学校にするのか、ということはまだ少し先に置いておいて、この舞台芸術というものを専門学科として学んでいくにあたって、どんな教育内容にしていったら良いのかという部分を、大きな括りで検討していただきたいと思えます。それから（３）想定される生徒像への対応ということですが、先程も少しお話をいただきましたが、中学校で演技を経験、あるいは勉強してきた生徒だけではなくて、演劇経験が乏しくてもこの学科で学んでみたいという生徒がいれば、そういう生徒さんもきちんと受け入れられるような教育内容にしていく必要があるかと思っております。※印に記載させていただきましたが、演劇経験についてはかなり程度の差が見込まれますので、そういった場合でも対応が可能となるように検討する必要があるかと考えております。それから、（４）は少し技術的な話ですが、平成34年度、2022年度から高校の学習指導要領が変わります。この学習指導要領が今年度中に告示予定ということで、その内容につきましてはまた情報提供させていただきますと思いますが、学び方ですとか、学習方法も変わってくる部分もあるかと思っておりますので、その点を考慮しながら内容は固めていかなければならないと考えています。それは最終的にどういうカリキュラムにするかという部分ですので、技術的な部分にはなるかと思えます。次に、２専門教科・科目としての教育内容の検討をしていただきたいと思っております。まず（１）演劇に関する科目のまとまりを整理する必要があるかなと考えておきまして、例としてア、イ、ウ、エとして４つにまとめさせていただきます。一つ目は、演劇の理論ですとか歴史に関する

る科目が必要なかどうかです。主に座学になろうかと思いますが、脚本作りなどが必要かどうかです。次に実際に演じることに係る科目ということで、基礎演技ですとか、劇表現といった名称の科目を置いている学校がございますが、演じることに係る科目です。次に、体作り、話し方、発声、発話といったもの、演じるために必要となってくる基礎的な部分を科目としてどう置いていけば良いのか。それから、照明などの舞台技術ですとか、先程も幅広にというお話がございましたけれども、公演の企画・制作等に関する科目を置く必要があるかどうかという部分を例として示させていただいております。それから（２）に、次の各項目の検討の必要性、とあるのですけれども、このあと御説明をさせていただきますが、演劇について学んだことをどうやって成果発表していくかということを見ると、学校によっては、最終年度、卒業の年度に成果発表をする学校があります。そういった卒業年度の成果発表を見越して、１年目基礎、２年目応用、３年目実践といったように科目配置をしていったほうが良いのか、次のポチにあるように、毎年度、学年ごとに発表している学校もございまして、その場合は、各年度の中で発表に繋がるような科目配置をする必要があるのではないか、というところが検討材料になるのかと思います。その他、古典芸能の配置の必要性、ダンス関係、ダンスといってもクラシックバレエですとか、コンテンポラリーダンス、モダンダンスですとかジャズダンスなどがあるようですけれども、こういったダンス関係の科目をどう置いていくのか、ということなどが検討の材料になるかと思っています。３として、共通教科・科目の配置の検討にあたっての配慮ということがございます。高校で実際に必修科目を学んでいく際に、芸術の科目、ここに、音楽、美術というのがありますが、学校によっては音楽を必修としている学校もありますし、普通科と同じように、音楽と美術を選択できるようにしている学校もございます。どちらかにウェイトを置いたほうが良いのかどうかということを検討していただければと思います。（２）として共通教科・科目として適当な内容ということで、前回の議論の中でも、専門学科ということと専門科目が 25 単位と全体に対してかなりボリュームがある中で、例えば国語という教科の中で戯曲を学ぶとか、英語を使って戯曲を学習することによって、演劇を学びながら共通教科である国語や英語を学ぶこともできていく、というような科目を置くことが幅広い進路に対応するには必要かと考えるというお話があったと思いますが、こういったところに配慮する必要があるかどうかといったところを議論していただければと思います。最後に、その他ということで、教育内容とは関係はないのですが、実際に学んでいくということを考えていくにあたって、この舞台芸術科の実技を学んでいくのに適当な 1 レッスンクラスの規模について御議論いただきたいと思っています。他県では 40 人程度の募集をして、生徒が入ってきてそれを 2 つに分けて、20 人ずつくらいに、1 クラスを 2 つに分けて展開していくという学校が多いと聞いております。先日、ワーキンググループにおいて、高校で演劇部の指導をしている先生などに聞きますと、1 つの集団を教えるということを見ると、25 人くらいが最大ではないかというような意見をいただいております。1 レッソンのクラス規模としてどのくらいが適当なのか、私共が教育課程

を実務的に考えていくときに必要になってきますので、このあたりを検討していただきたいと思っております。前回も他都府県の舞台芸術関連学科のカリキュラムですとか、教育内容の資料を皆様方にはお配りさせていただきましたが、それを資料4で、舞台芸術関連学科を実際に設置しているAからDの4つの学校の教育課程、カリキュラムを一覧にさせていただきました。学校によって特徴が違う部分がありますけれども、Aは単位制の専門学科の学校でございまして、1年次から3年次まで必ず「演劇」という専攻を置いて、ここでは定期公演に向けて、あるいは授業成果発表会に向けて、まさに演劇の指導をしているという科目構成になっております。また、1年次の演劇舞踊概論、基礎的ないわゆる座学をまず1年次に置いています。また1年次の身体表現基礎というところでは、舞台表現者の資質向上ということでダンスですとかアクションといったものを学習していると聞いております。2年次では、演劇舞踊史、歴史的なものを置いておりまして、3年次では、卒業時の公演に向けて創作演習、そして専攻の演劇にかなり時間を割いて授業を行っているということです。この学校は単位制ですので、選択科目を御覧いただくと、例えば専門選択で※1とありますが、これを2、3年次に置いておりますけれども、下にありますように様々な科目が選べるようになっております。この中から1科目選択して学べるようになっております。それからこの学校は、2年次の19、20の単位を御覧いただくと、芸術で※2とありますが、この学校は、音楽、美術、工芸の中から芸術を1科目選択するようになっております。また、3年次には自由選択ということで、古典演習ですとか、世界史ですとか、日本史、数学、英語などの一般的な科目も選択でき、歌唱などもございまして、最大6単位まで選択できるようになっている学校でございまして、Bも単位制の専門学科の学校でございまして、劇表現という科目を置いております。この学校が1、2年次に舞踊の一環でクラシックバレエ、モダンダンスというものを3単位ずつ、週3時間ずつ、1、2年次に必ず学ぶように置いています。それから、2年次には全員が日本舞踊を学ぶように設定されております。3年次に成果発表会がございまして、2、3年次の総合演習の中で、成果発表会に向けて公演の準備をしています。この学校も単位制でございまして、共通選択ですとか、専門選択、あるいは3年次には共通または専門の中からということで、2科目以上3科目まで、かなり幅広く自分で選択ができるという学科です。一方、CとDは学年制の学校でございまして、専門科目につきましては、かなり固定されて学ぶような形になっております。また、Cの学校は1学年に音楽Iを入れておりまして、音楽Iを必修にして専門科目の中で学んでいる学校でございまして、この学校は伝統芸能を2学年に必修で置いておりまして、伝統芸能として狂言をやっています。それから、2、3学年では歌唱表現という科目を置いておりまして、発声や発話など、声楽的なものを学んでいます。Cの学校は、1、2、3学年、学年ごとに公演がございまして、1年生では授業を公開するという形、2年生でも公演を行い、3年生で卒業公演を実施している学校とのことです。それからDの学校は、1学年は演劇論ですとか、3年間を通じて伝統芸能を学ぶ学校でございまして、能、狂言などを学習し実技を行っています。2学年では舞台技術を入れておりまして、

3年間通じて劇表現という科目を置いて、劇表現の中で発声ですとか、体の動きなどの基礎的なものを学習しているとのこと。そしてこの学校は3年間の集大成として最後に卒業公演を行うという学校です。学校によって学び方ですとか、科目の配置が違いますけれども、ここではカリキュラムを作るということではなくて、どういう教育内容が必要なのか、という視点で御意見いただければと思います。よろしくをお願いします。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。ただいまの説明の全般を通して御質問はありますか。よろしいですか。では、順に追っていきます。まず資料3に沿ってですが、1検討にあたっての基本的な考え方の（1）は良しとして、（2）学年制なのか単位制なのかは置いておいて、専門学科として必要な教育内容を検討する、それから（3）の想定される生徒像への対応、こちらは、演劇経験が乏しい、あるいはゼロという生徒もいるわけで、初めてこの学科で出会っていく、出会いたくて入ってくるという生徒もいると思うので、その幅を教育の中で持つておくということですよ。これらについては御意見ありますか。

（堀江構成員）

これは入口論ですよ。前回の議論は出口論を伺ったのですけれども。これは入ってくる子どもたち、将来の目標もきっと幅があると思うのです。劇団四季のオーディションを受けてみようというような目標を持つ方もいらっしゃるけれども、私は裏方がいいとか、あるいは演劇界とは全然違うところを目標としているのだけれどもここで学びたいのだという方もいらっしゃるでしょう。そういう意味でも想定される生徒像というものを一応念頭においておいた方がよろしいのではないかとこのように思います。

会長（能祖構成員）

今日の議論ではないのですけれども、入試はどのようなふうになっているのでしょうか。

（事務局）

学ぶべき教育内容が固まって、どういう生徒さんを集めていくのかということが決まってきた段階で検討することになると思いますが、基本的には入学者選抜は、5教科の試験がございます。国語、数学、理科、社会、英語がございます。それ以外に、学校によっては、例えば音楽科ですとか美術科を持つような学校ですと実技を入れている学校もございますので、そういったものを課して、意欲をみる、あるいは技術的なものを見る必要があるのかどうかによって変わってくるのかとは思いますが。

会長（能祖構成員）

わかりました。高校の入学時点で今まで演劇をやっていたという人がいるとすれば、中学で演劇部でしたという人、小さいときから市民劇団みたいなものに入っていますというような人、市民劇団に限らないですけども劇団に入っている人、劇団に近いかもしれませんが、事務所に所属しているという人、それくらいかと思うのです。ただ、そういった人はどちらかというとな数はそんなに多くはないと思っています。高校で演劇と出会っていく人が多いのですよね。ですから、そんなに経験の多い少ないがあるわけではないような気がするのですけれども、どうでしょうか。むしろ、モチベーションというか、やってみたいという気持ちが問われていくのではないかと思うのです。入ってくる生徒の多くは、演劇に興味があるけれども今までやったことはない、という生徒が圧倒的に多いのではないかと思われるのと、出口論でいうと、ものすごくシンプルに言えば演劇を学ぶ大学に進むか、一般の大学に進むか、というところではなかろうかと思うのです、大きな選択としては。それはどちらにも対応できるようにということだと思います。ですから、想定される生徒像というのは、ものすごくそれまで演劇の特別な教育を受けてきたような子どもではなく、ごくごく一般の、だけれども演劇をやってみたいと思う生徒であろうと思うのですけれども、そういう認識でよろしいでしょうか。

（賛成の声）

では、2（1）演劇に関する科目のまとまりの整理、カテゴリー、例では4つのカテゴリーになっていて、まず座学ですよね、理論、歴史、ここに脚本作りというのも入っていますけれども、座学での勉強、それからイというのが基礎ですかね、演じるということ、演技に関する科目、ウがもう少し基礎の体づくり、発声という基礎的な訓練、エがテクニカルな部分、舞台技術、公演の企画・制作という4つのカテゴリーになっているのですが、例えば古典芸能というのはどこに入ってくるのでしょうか。イなののでしょうか、それとも別のカテゴリーなののでしょうか。

（久我構成員）

アに入る可能性もあるし、イに入る可能性もあるかと思います。

（眞野構成員）

両方に跨っていますね。

会長（能祖構成員）

まとめとしては、この4つに分けていただいているのですけれども、こういうことでもいいのか、あるいはさらにア、イ、ウ、エ、オとか、カとか、キとかもあるのではないかとか。また、今日は議論しなくてもいいとは思いますが、発話、発声というのは、例えば新劇を代表する文学座の研究所では発声の時間を取っていないとい

うことなのですよ。それを聞いて私はびっくりしたのですけれども、もちろん青年団とか、そういった劇団にも発声の時間はありませんし、発声というものが日本の演劇教育の中ではあまり重きを置かれていないのです。さらに大前提で言えば、私が申し上げるようなことではないのですが、日本の演劇にスタンダードはありませんので、各々が手探りでやっている。それは大学もそうです。大学の演劇教育においてもスタンダードがない中で手探りでやっている。それから、各劇団もそれぞれのメソッド、方法論を持ってそれぞれでやっている、というのが現状です。その中で、高校教育の中で演劇をどうしていくか、これが相当大きなところとなると思うのです。具体論に入っていこうとすると。基本的な考え方、コンセプトはこれで良いが、具体的にどういうカリキュラムを組むのかといった時に、まず考えなければいけないのは、スタンダードがない世界の中で高校生に対してどういう教育をやっていくのかということです。でも、ここでまとめたものはわりとわかりやすく、まず知識を勉強しましょう、つまり座学ですね。それから、順番は別としても、演技、演技をどう教えるのかという方法論は置いておいて、演劇を学びにきている学生のほとんどは役者になりたいという動機でできていると思いますから、演技の教育に力を入れましょう。それから、そもそもの身体のことなので体作り、それから言葉を使うので、ここでは発声が入っているが、本当に基礎的なところをやりましょう。それから、演劇は役者だけでは当然できませんので、それから今後の展開、例えば照明と出会って照明がすごくおもしろくなったとか、企画に出会って企画をやりたいという可能性も含めて、舞台技術、テクニカルなこと、企画・制作のこと、もっと言えば演劇的なモノの見方といったことですよ、そういったことも含めて取り組んでおきましょう。ここに掲げてあるのは以上の4つですよ。これでよろしいでしょうか。

(眞野構成員)

今の段階ではこれで良いのではないのでしょうか。例えば脚本作りを皆でやる、あるいは作品を毎学年やるべきだ、ということになればエの問題は解決されるわけで、ア、イ、ウ、エというこの4つで網羅的であるし、過不足はないと私は思います。

会長（能祖構成員）

そうですね。そう言いながら今思ったのですけれども、もし1点追加するとしたら、成果の発表に繋がることなのですから、プロセスを経験して形にしていく。つまり作品を、クリエーションを体験するということですかね。そこは結構大きなカテゴリーになってくるかなと思うのです。基本コンセプトにもありましたように、他者と対話しながら、意見をぶつけあったりしながら、それぞれが自分の役割を持って、役者とか、演出家とか、脚本家とか、照明とか、企画とか、役割を持って、お客さんもちょうと集める。そのプロセスをきちっと一通り経験していく。そして成果として発表していく。というのは、どうでしょうか。1つのカテゴリーとして入れた方が良いのか、それはカテゴリーでなくても良いのか。

(田中構成員)

是非入れていただきたい。学力という観点で知識・技能は、このア、イ、ウ、エに入っていると思うのですが、思考力、判断力、表現力というのが学力の2つ目の大きな要素なのですけれども、それは会長が言われたような、形にしていくというプロセスを経験させる中で思考力、判断力、表現力を問うという意味では、オとして最初から謳っておいた方が良いと思います。

(眞野構成員)

これらは全て実技を通じてできると思っていた。演劇の理論や歴史、これは座学ですが、脚本作りや色々な役割が1つの作品を作っていくって、例えば照明がその作品の要どころのインスピレーションを握ることもあるし、そういう意味で、全てにオが絡んでくるわけです。ですから、オをアにして、それでその下にたたき台のア、イ、ウ、エがくるというような感じで、現場で生徒同士が話し合っ、先生もそれに加わってというような、とても動的な状態の授業でなければならないな、と強く今感じていたのです。今後カリキュラムを組む時に話をするのかとも思ったのですが、田中さんにそういうふうにいわれてみると、全体に田中さんがおっしゃったような生徒に身に付けさせなければならないもの、ということですので、何よりもオが一番大事だから頭の方に置いた方がいいですね。その後、たたき台のア、イ、ウ、エが来れば万全だと思います。

会長 (能祖構成員)

今、ぱっと言葉にしてみると、例えば、それぞれの役割を持って発表公演までの創作過程を体験する、というようなことになりそうですでしょうか。

(眞野構成員)

単純にそうは言えないですけどもそういうことですね。

(久我構成員)

ここは(1)のタイトルが、科目のまとまりとなっているので、そういうものはこの中に入れにくいのですけれども、タイトルをむしろ変えて、科目と教育の手法というのでしょうか、その基本的なものというくらいにしまえば。とても重要なことなので、それをどこに入れるかという問題が少しあるかもしれませんが、タイトルを変えて入れてしまっても良いかと思います。

(堀江構成員)

私も同じ意見で、舞台芸術の理論から実践までを可能とするような科目のまとまりとしてア、イ、ウ、エに取り組みます、そういう整理が一番良いのかなと思いました。ア、イ、ウ、エというまとまりをつくる指導原理として、皆さんがおっしゃったような理論から実践までを一通り学べるようにしましょうと。

会長（能祖構成員）

例えば、資料4のA、B、C、Dの学校の一つ一つの科目をこのア、イ、ウ、エに張り付けていくと、何かしらに当てはまっていくということですよ。カテゴリーってそういうことですよ。ですから入らないものがあつた時に、それは新しいカテゴリーを作らなければならない。もちろん新しい学科を作るわけですから、A、B、C、Dは参考にしかないわけですが、Aでいうところの創作演習とか、Bでいうところの総合演習というのは、実際に舞台にのせるまでの過程を経験していくということですよ。そういうことと言えば科目になってきますよね。

（堀江構成員）

それは、エの企画・制作に関する科目というところでできると思うのですが。

（稲童丸構成員）

私も、最後の学年の制作なり、卒業発表までの中で、実際には公演会場を押さえるとか、ポスターを作るとか、チケットを用意するとか、色々なメディアに情報発信をするとか、そういうところまで含めて、おそらく卒業発表であればちゃんとしたホールでやらせてあげたいとか、そういうふうになるので、そこまでできるようにこの卒業の制作、発表の中で、細かくやっていくのか、それとも、しっかりと劇を作ってそれから発表するまでの流れを1回学ばせるのか、どちらなのかなとは思っていたのです。でも、発表があればその過程は自然に習っていくのですけれども、教科となった時に難しい。ですので、堀江さんがおっしゃったような形で一番上にあつて、その中でこれだけ学んだらこういうところまで経験できて、その中で最後自分はこちらの道へというのものもあるのかとは思っています。

（堀江構成員）

現実に教科をどうするかというところはわからないのですけれども、チケットを売って、あるいはこの会場で、この会場分を売り切れるとか、あるいはこの日の設定、時間の設定でいいのかどうか、とか。自分が表現したいだけでなく、お金を払って、時間を使って人に観に来てもらう、その人たちに感動を与えて帰ってもらうというところまで、やはり高校生ですから、ここまで学んで欲しいですよ。

（稲童丸構成員）

今の時代必ず言われることですよ、小学生からそういった経済活動の学習は始まり出していますのでね。

会長（能祖構成員）

どうでしょうか。ア、イ、ウ、エ、オとして1つのカテゴリーにするか、それともカテゴリー分けに入る前段階というのでしょうか、そうするかどちらの方がいいでしょうか。

(荒木構成員)

おそらく、これから先、この科目という括りが決まると、具体的にこの科目を作っていくましようということになるとすると、今、まとめていただいたように、表題自体を変えて、全体をやる、その為にこういう科目立てにしていきたいと思いますという流れの方が、今後の議論というか、ワーキンググループなどを含めてもやりやすいのではないかと思います。

会長（能祖構成員）

そうすると表題をどういうふうに変えればいいでしょうか。

(堀江構成員)

企画・制作の理論から実践までを経験できるような科目のまとめ、でしょうか。

(眞野構成員)

科目でいえば、総合演習ですよ。

(事務局)

事務局から申し上げますと、資料3の1(1)の三つ目、演技、舞台技術、企画・制作等の理論から実践までの指導を通じた幅広い演劇教育、そういった演劇教育を実現するためのまとめを整理しましたということで、ア、イ、ウ、エが並んでみると、この基本コンセプトを全部叶えられますよという繋がりにはなるかと思えます。

(眞野構成員)

少し視点が違いますけれども、例えば、若い子で劇団四季のオーディションに来る子で、劇団から見て魅力的だなという素材、どういう子が魅力的ですか。

(近藤構成員)

やはり、自分がプレイヤーとしてであろうが、スタッフとしてであろうが、何かを表現して、それを届けたい、という志を持っている人ですよ。そういう人たちに魅力を感じて一緒に仕事をしたいと思えます。

(眞野構成員)

それは、いくら踊れるとか、いくら上手くその場では表現できますということ以前にそこを見られますか。

(近藤構成員)

そうですね。もちろん俳優になる場合には、踊りのスキルであるとか、歌のスキルであるとか、それらも当然大切なことですが、それだけではなくて、やは

り自分が演劇を通して何を届けたいのか、お客さんから拍手をもらいたいのか、感動させたいのか、自分の体を使って表現したいとか。そういった何か目的とか、志がある人じゃないと、魅力を感じないのですよね。そういったところに向かうという事は大切だと思います。

(眞野構成員)

私もそう思います。荒削りでも魅力的な子はたくさんいるし、例えばこういう言い方は適切ではないのかもしれませんが、テレビで今売れている俳優のような雰囲気を持っていなくても、やはり見た瞬間に魅力を発掘するような子たちがいるのですよね。そういう子たちが上手く育つような教育が欲しいですね。

会長（能祖構成員）

高校生なのであまり小さくまとまっても、大きいところで、というのは根底にあると思います。当たり前ですけども、自分もまだ固まっていない段階で、今までの自分を崩して、壊して新しい自分を創ろうとしている、高校生、大学生というのはそういう時期かと思いますから、傷つきやすいでしょうし、そういう段階で、でも小さくまとめるのではなくて、ということですよね。では、創作過程みたいなものを、1つの科目のカテゴリーとして扱うのか、全般にいれるのかというのは、今の議論を踏まえて事務局で整理してもらっていいでしょうか。

(賛成の声)

次に、(2) 次の各項目の必要性の検討、成果発表を1年ごとにやった方がいいのか、3年生で卒業制作としてやったほうがいいのかを今ここで議論するということですか。

(事務局)

議論といいますか、御意見をいただければと思います。

会長（能祖構成員）

結論ではなくて、意見ということですね。わかりました。いかがでしょうか。

(堀江構成員)

稲童丸さんにお伺いをしたいのですけれども、神奈川県は中学から演劇が盛んで、昨年全国大会があったのですけれども、全然レベルが他県とは違っていました。例えば、ある県では代表としていらっしゃったのですけれども、その県ではその学校しか演劇部がない。ですので、神奈川の希望ヶ丘中学校が演じた直後は会場がざわついてちょっと信じられない、というくらいだったのです。ですから、そういう生徒も高校1年生としてこの学校に入ってくるということが想定されるわけですよね。

そうすると学年ごとにまとまって、1年生の発表、2年生の発表とするのか、それとも演劇部のように、1年生、2年生、3年生がそれぞれの役をやるというやり方ってきっとあると思うのですがいかがでしょうか。

(稲童丸構成員)

二通りあると思うのです。そういう生徒たちが何人か各学年にいたら演劇部ができるなというのが、私の考えです。場合によっては、この学科に入らなくても演劇部ならできるかもしれないとか、という形でやると、私は学年ごとに学習内容も違ってくるのであるから、学年でアトリエ公演的なものを、簡単なコンセプトを作りながら学年ごとに発表していくというのと、それとは別にメンバーが似通っているかもしれないし、別のメンバーがいるかもしれないけれども、演劇部で全国めざしましょうといった流れも場合によってはできてくるのではないかと思います。ですので、あまりどちらが良いとかどちらが駄目とかいうのは考えなくてもいいのかという気がします。経験はなくても、そういう子たちに引っ張られていたり、それがおもしろいと思ったら、中学校の演劇部って県内400校中100校あるかないかくらいです。学校の文化祭で劇発表をやらせてくれる学校が今どんどん減っていて、合唱コンクールに変わりつつあるので、宿泊行事のオープニングとか、文化祭のオープニングで、実行委員とか、有志が寸劇的な劇的な要素で、狂言回しが出てきてテーマを発表したり、インタビューを入れたりという劇的な要素というのは大体の学校でやっていますけれども、発表までとなると、もうその日は学校にとって吹奏楽部と演劇部が文化祭のメインの出し物の2つという形になるので、おそらくこういう学科がある学校であれば必ず演劇部はできて、頑張っていくのではないかと思います。

(眞野構成員)

目からうろこですね。こういう学校には演劇部がないと頭から思っていたのですがけれども、稲童丸さんがおっしゃるように本当にそうかもしれない。それであれば本当の意味で総合的な教育というか、教育現場でその場がずっとあり続けられますよね。それは素晴らしいと思います。

(稲童丸構成員)

さらに少しでも一般の学校よりも舞台関係の装置や場所があれば、演劇部ももっと盛んになりますよ。設備まであれば、学科でなくても演劇好きな生徒がこの学校に集まってきますよ。

会長 (能祖構成員)

このA、B、C、Dの学校には演劇部はあるのですか。

(事務局)

ございます。

会長（能祖構成員）

余談ですけども、桜美林大学は卒業公演はやらないのです、あえて。演劇の実技を教えている大学はどこでも、必ず学年発表あるいは卒業公演というものがあるんですけども、桜美林は当初からやらないというのがコンセプトで、全てオーディション制なのです。演劇を学びに入って、役者になりたいくて入って、公式の舞台、自分達の学生劇団は別としても、教員が抱える公式の舞台には1回も立たずに大学を卒業していく学生は山のようにいるのです。それはあえて、この世界で生きていくためにはどうしたってオーディションなので、卒業した段階から、在学中からなのですが。ですので、オーディションには慣れておこうと。つまり、落ちることに対する耐性のようなものを身に付けておこうというのが考え方です。ただ、それは桜美林大学の考え方であって、高校生は舞台に立ったほうが良いと思いますよ、1回は必ず。その立ち方が学年ごとなのか、卒業公演としてなのかということですよ。どうでしょうか。あるいは、それぞれの考え方なので、今は触るくらいで次にいこうということでもいいでしょうか。

(田中構成員)

ただ、専門学科ですけどもやはり高校生ですので、やはり学力を身に付けるという観点では、成功体験、失敗体験、それぞれ1回でも多いほうが、学力を付ける機会になります。なにがなんでも毎年とは思わないですけども、1回でも多くそういう機会を、高校生として舞台芸術を通して高校を卒業していく機会としては多いほうがいいのかなと思います。

会長（能祖構成員）

レベルが段々上がっていくといった感じですよ。

(田中構成員)

そうですね。自分の成長も感じられるのではないかと思います。

(眞野構成員)

私も、資料4を見ながら思っていたのですが、毎年公演をすべきですよ。学年ごとに。やはり高校生の成長、あの3年間というのはすごく大事な3年間ですから。早いですし。何らかの形の表現が集团的にできるということ念頭に置いて、どういうふうになればうまくカリキュラムが組めるのかというふうに入っていて考えた方がいいような気がします。

会長（能祖構成員）

役者に限らないと思いますけれども、成長は場数にある程度比例するといったところもありますものね。場を踏めば踏むほど、おっしゃるとおり、成功も失敗も含めて、自分の肥やしになっていくというのはある意味真実だと思いますから、そういった意味では学年ごとにとというのは1つあるかもしれないですよ。

では、次にいきます。毎年度の発表に繋がる科目、これはいいですね。では、3番目、古典芸能の配置の必要性、つまり、必修にすべきか、選択にすべきか、ということ。古典芸能というのは、前例でいうと、能、狂言、日本舞踊でしょうか。それを選択の方がいいのか、それとも、やはり1回は必修でやっておくべきだろうと。これも一長一短だとは思いますが、概ねどちらの方がよろしいと思いますか。

（堀江構成員）

古典芸能の種類にもよるのではないですか。今おっしゃったのは、所作を伴うものですが、それ以外に伝統芸能といえば太鼓だったり、そういったものもあるわけですから、それは選択でもいいのかもしれないし。

（眞野構成員）

少し話ははずれますが、最近のお芝居の傾向で、台本を読んだ瞬間に映像的なのですね。ですから、例えば若い人の台本を読んでいると、これは映画でいうところの寄りを書いてあるなって、これ引きで書いてあるなって、このシーンはワイプしているなって感じになるのですよ。ですから、映像を科目で整理するというのはなかなか難しいですが、例えば美術だとか、そういうものと絡めて、そういう経験も、全体教育という意味でいうと、ほぼ演劇と変わらないようなカテゴリーだと思うので、それぞれに科目というか教え方で上手くできないか、と考えています。古典芸能については、鑑賞で収まる部分と所作まで教えなければいけないというのがありますよね。古典芸能は、20歳以降から始めるというのは難しいのですよね。それこそ専門にする学科でも作らないと難しいのではないですか。

会長（能祖構成員）

もちろん古典芸能のプロになるという意味ではおっしゃるとおりだと思うのですが、体験としてはどうでしょうか。グローバルと本当に耳にたこができるくらい言われておりますけれども、海外に行ったときに、それは旅行でもいいですし、海外研修のようなもので行ったときに、日本舞踊を少しでも踊ったことがありますとか、狂言を少しやったことがありますとか、ということはやはり日本人としてのアイデンティティーというのでしょうか、そういったことに繋がるような気もするので、せっかく舞台芸術関係の学科を作るのであれば、少し触れておくというのは実際に自分の芸の肥やしになるかどうかは置いておいても、無駄ではないような気がするのですが、それが選択でいいのか必修なのかということはあるかと思いますが。

(事務局)

日本舞踊を必修でおいているBのような学校は、踊りに加えて着物の着付けですか、所作を学習してもらいたいということで必修としているようです。

(稲童丸構成員)

県の高校の中で、和服とかそういうのを取り入れることを指定している学校がなかったでしょうか。舞岡高校は、日本文化とか、和服の文化とかを生徒が習っていて、校長先生が卒業式に紋付はかまで証書授与するということを行っていますよね。私は近くの学校なので、毎年卒業式に伺うので、そういう学習を茶道とかも含めて、和服とか、日本文化の指定を受けてやっているのだという話を聞いたことがあるのです。おそらく選択教科か総合的な学習の時間の中で、生徒は必ず3年間で1回は着物、浴衣を着てとか、そういうのをやるという指定が確かありましたよね。

(事務局)

前回の高校改革の中で、そういった指定をしております。

会長（能祖構成員）

どうですかね。選択というレベルでいいのか。

(久我構成員)

今、お話を聞いていると、触れたほうが望ましいというのはおそらくそうだと思います。その触れ方をどこまで触れるのかというところで濃淡が出るのかと思います。選択科目にしてしまって全然選択せずに卒業してしまうというケースも、それもいいのではないかというのか、必ず何か触れたほうがいいのか。選択ではあるけれども触れたほうがいいのかというレベルなのか。どちらなのかなという感じがします。

会長（能祖構成員）

選択といった場合、古典芸能で例えば日本舞踊と能と狂言の3つがあった場合、必ずなにか1つを選択するという意味ですよ。

(眞野構成員)

それほど神経質になる必要はないと思うのですけれども。私たちの仲間でも30歳を大きく過ぎてからコンテンポラリーダンサーが突然幫間芸に変更して、もう20年くらいやっています。それから例えばテントを組んでお芝居を、旅公演をやっていた俳優が突然国立劇場の歌舞伎の養成所に入って義太夫語りになって、今や名前が一番前に出るようになっていきますから。それはもう40、35年くらいかかったのでしょうか。ですから、そういうことでいうと演劇全体が社会との間で同じ呼吸をしていけば、必ずそういうことは起こりえるので、あんまり神経質に古典は教えるものだというところから少しは離れておいた方がいいのではないのでしょうか。触れておけばいいのだと思うのです。

(稲童丸構成員)

資料4を見ていると、大体2時間くらいの古典芸能という形になっていますよね。そうするとその学年で週2時間やるとしたら、例えば能や狂言だけに固定しなくても、70時間は年間に授業があるわけですから、15時間で4セット体験するとか、その中には鑑賞もあるけれども、実際に所作もあったり、先ほど申し上げたような着物を着て動いてみたりというようなことも体験としてやるというようなことがあれば、ある程度全員が必ずそういうこともできます。その方が個人選択や個々に細かく分けると生徒の集まり具合や指導する先生のコマのこともあるので、時期が決まっていて、例えば70時間だったら20時間の授業を3セット組んで前後にガイダンス等を入れたほうが具体的で中身が濃いといえますか、ある程度の体験、経験ができるのかなと思います。

(眞野構成員)

今、私どもが意識しているのが、日本の柔道になる前の体術みたいなものがありますね。剣道もそうですけれども、武術というふうに総称されるようなものが意外と私たちの今のあり方に欠けているものなのかなというふうにおっしゃる方が最近多いです。実演家のほうに多いです。

会長(能祖構成員)

私は、稲童丸さんのアイデアは非常にいいと思いますが、いかがでしょうか。つまり、必修であるが、中身は1つに固定せず、広く浅く、鑑賞も含めて体験していくということ。

(賛成の声)

(堀江構成員)

次のところで申し上げようと思ったのですが、共通科目のところ。少し先走りますけれども。どうしても日本語による演劇、日本の作品、それをしっかりこういう学科で学んで欲しいなと考えておりました、そうなってくるとその作品の中にやはり和の作法ですね、歌舞伎の要素、能の要素、そういったものが入ってくる作品がやはりどうしても出てくると思うのです。そういう時に、それを1回も学ばないで演劇界に入ってくるよりは、やはり基本的なところを知っておいて欲しいな、というところがありますので、稲童丸さんがおっしゃったようなアイデアであれば教育課程も上手く組めそうですし、ちゃんと知っていると、もし実社会で演劇でそういう場面があったら、基本を思い出して、自分でそれを学んで、それを劇表現などに取り入れていくということが可能性として残るのではないかなと思います。

会長（能祖構成員）

わかりました、では、続いてダンス関係の科目の配置。これはダンスのどこに力を入れるかということですよ。もちろん一通り広く浅くというような考え方もあるかと思いますが、いかがでしょうか。そもそもダンスがいないのではないかという考え方もあるかもしれません。ただ、近藤さん、ミュージカルをやりたいという生徒は、かなりの比率でいると思うのです。声優になりたいという生徒とミュージカル俳優になりたいという生徒はどうしてもたくさんいると思うのです。どう思われますか。

（近藤構成員）

やはりミュージカルということで考えるとクラシックバレエは必修だと思います。クラシックバレエが全てのダンス表現の基本になると思います。ジャズダンス、コンテポラリーダンスの基は、源流としてはクラシックバレエであると思いますし、クラシックバレエが体の表現、動きの表現の美しさとか、心の表現とか、そういったものの全てを兼ね備えているのがクラシックバレエだと思いますので、劇団四季の研修生には必修科目として必ずクラシックバレエをやらせています、例えシンガーで入ってきた場合でもです。そういうことを考えると、踊りの中で何を選ぶかというやはりクラシックバレエは外せないのかなと思います。

会長（能祖構成員）

小さいときから習っている生徒ももちろんいると思いますが、今はやっていないけれども昔習っていたという生徒も。まったく習ったことがない生徒の方が圧倒的多数になりますよね。そうなったときにクラスは初心者向けと、経験者向けというような配慮は必要なのではないでしょうか。

（近藤構成員）

基礎クラス、もしかしたら経験している人は物足りなくなるかも知れないのでその上があってもいいかと思うのですけれども、クラシックバレエの場合、どんなにキャリアを積んだ人でも必ず基礎レッスンというものはやるのです。ですから、そこがあってもいいとは思っています。基本的に研究生のコースはクラシックバレエ、基礎コースを全員が受けています。研究生を終えて劇団員になった俳優は、レベルに合わせて、上級者、中級者、初級者というのがあって、シンガーの人はどうしても初級ですし、バレエで入ってきた人は上級を受けるというような流れになっています。スタートとしては研究生として同じレッスン受けるという方式を採っています。

会長（能祖構成員）

クラシックバレエ以外にダンス系のレッスンというのはあるのでしょうか。

(近藤構成員)

あります。ダンス系でいうと、コンテンポラリーダンス、ジャズダンス、いわゆるシアターダンスというもの、それからタップダンスですね。それから地唄舞のレッスンもあります。朝、研究生で言えばクラシックバレエを1時間半、それから呼吸法と開口レッスンを30分、お昼を挟んで、日替わりでタップだったり、コンテンポラリーダンスだったりという他のダンスを入れて、その後は少人数に分かれて、歌唱だったり、台詞だったり、というものに分かれてレッスンを受けるという構成にしています。

会長（能祖構成員）

どうでしょうか。クラシックバレエというのは。実はちょっとびっくりしたのです。桜美林大学はコンテンポラリーダンスなのですね。クラシックバレエの授業もありますけれども、中心はコンテンポラリーダンスでやっています。

(近藤構成員)

コンテンポラリーダンスもあります。コンテンポラリーダンスでは駄目ということでは全くなくて、それはあり得る話だと思います。

(眞野構成員)

両方とも、体作りができていう前提なのですよ。やはり呼吸法というのはなるほどと思ったのです。

会長（能祖構成員）

呼吸法っていいですよ。

(眞野構成員)

基礎の基礎ですよ。

会長（能祖構成員）

呼吸法にも色々な種類がありますよね。では、一度ダンスに話を戻します。現実問題ミュージカルをやりたい生徒たちはたくさんいて、もしそこに沿っていくのであればクラシックは必須ではないですかというのが、今いただいた御意見なのですけれども、どうでしょう。

(荒木構成員)

今、お話を伺っていて、舞台に立つということを考えたときにクラシックバレエの重要性ということは十分わかったのですけれども、最初のコンセプトにあるように、必ずしも受け入れる生徒たちが演ずるばかりではなくて、裏方みたいなこともあるのだとすれば、2年次や3年次でクラシックバレエもできます、というような

選択であるということが重要であるのかなと思いました。全員である必要は必ずしもないのかなと思いました。

(近藤構成員)

そういう考えもあると思います。

会長 (能祖構成員)

選択だとして、ダンスの種類としてはクラシックバレエということになるのでしょうか、もし1つであるとしたら。1つである必要もないのですけれども。クラシックバレエとコンテポラリーダンスを選んでもいいのですよね。

(近藤構成員)

バレエレッスンという括りでやるという考え方もあるのではないのでしょうか。

会長 (能祖構成員)

では、クラシックバレエは演者にとっては、特にミュージカルをどこかで意識しているような俳優にとっては、やはり重要なのだというところで、やはりあった方がいいのではないかとということが一点。とはいえ、演じる者ばかりではないので、必須だと少し行き過ぎかというところですよ。ダンスの種類としてクラシックバレエは押さえつつ、他にももしかしたらあっても良いのではないのかということですよ。そのようなことでよろしいでしょうか。

(賛成の声)

では、3にいきます。(1)芸術科目の指定の有無。音楽、美術、それ以外にもありましたよね。

(眞野構成員)

映像はどうですか。

会長 (能祖構成員)

映像ですか。ここに入ってくるのですかね、映像は。それから、工芸や書道を置いている学校もありますよね。どうでしょうか。そこからいくつか絞るにしても選択ということでもいいのか、あるいはミュージカルをやるのであれば歌は必須だろうというようなこともあるかもしれないですし、どうでしょうか。

(眞野構成員)

これは現場の感覚、皮膚感覚みたいなものがとても大事だと思いますが、稲童丸先生、いかがでしょうか。

(稲童丸構成員)

色々な生徒がいたほうがいいのかと思います。本当に大道具、小道具ばかりで、こまめに作るのが好きで、半分大工さんみたいになっている中学生もいるのですよ。ですから、リハーサルの日とか、仕込みの日で大活躍したり、皆が演じているのに場合によっては外でトントンやっているような生徒もいます。そうかと思えば、お針子さんみたいになっている生徒も劇によってはいたりします。例えば、私の息子が大学のとくにダンスサークルで公演前に一番安い布を買ってきてミシンとか手縫いで衣装を作って公演に出るとか、ということもありました。高校生は、家庭基礎があるので、そこで調理と被服のようなものはおそらくやると思うのです。劇のなかでそういうものは色々あるのではないですか。そうすると、ミュージカルとかダンスが必ず入ってくるような音楽系のものもあるけれども、美術的な大道具、小道具とか、そういうものもあるので、あえてこの学科は音楽だけとか、美術だけよりは個人選択が可能な方が、色々な子がいて面白いのかなと思うのです。

(眞野構成員)

荒木先生の見聞も聞きたいですね。

(荒木構成員)

今、おっしゃっていただいた通りで、先程申し上げたとおり色々なことをめざしている生徒がいるのだとすれば色々な選択ができればということだと思ふのです。ただ、実際に学校の立場でいうと、先程、レッスンの人数をどのくらいにするかというお話がありましたけれども、あまり少ない人数で、あれもこれもというのは難しいのかなと思います。あるとすれば単位制みたいな学校の中で、自由に選べます、なるべく幅広い可能性を残していただいた方が生徒たちにはいいのかなと思います。この芸術というのは、先程あった指導要領の中では必履修科目で、必ずどれかを取らなくてはいけないというところに指定されているのが、音楽であり、美術であり、書道であり、工芸であるということなので、そういうこともあって取らなければいけないのであれば、選べるということが大事なのかなと思います。

会長 (能祖構成員)

映像とか入ってくると大変でしょう。施設のにも。

(眞野構成員)

映画をたくさん見せるということだけでも。見る機会を設けるということだけでも。

会長（能祖構成員）

それでは、先に行かせてください。（2）舞台芸術に関する共通教科・科目というのですが。

（堀江構成員）

ハードの問題なのですけれども、図書室ですよ。関連図書をしっかり揃えなければいけない。先日、ゴキブリを擬人化した演劇があって、劇団員にザムザに聞いてみようと冗談を言ったら、ザムザという単語に反応をしたのは劇団長しかいなくて、他の人は何を言っているのだろう、というような反応だったのです。シェイクスピアも読まない。原文で読むべきかは別にして、文学は基礎であるし、これは音楽も演劇もみんな同じだと思うのです。オペラだって戯曲が基礎ですから。例えば今度新国立劇場で芸術監督になる大野和士さんというのも、他の指揮者と違って、高校時代、彼の書棚というのは文学作品で埋まって家がつぶれるくらいだったということですから、とにかくしっかり背景があって初めて劇表現ができるということだと思うので、基礎中の基礎ですから、そのあたりはしっかり学んで欲しいなと思います。

会長（能祖構成員）

国語なら国語、英語なら英語で、戯曲を取り入れた教育というのは可能なのでしょうか。

（田中構成員）

学校設定科目とって教科の発展的な内容であるとか、教科の横断的なものというのは学校ごとに作れます。ですので、国語、英語として学校で設定すれば舞台芸術に関連するものを作ることも可能です。

会長（能祖構成員）

専門課程ではなくて、ですか。

（田中構成員）

専門課程ではなく、学校設定の科目としてです。教科は国語の中でもそういうものは作れます。

会長（能祖構成員）

これができたら、すごく面白いと思います。では最後に、4 その他のところですが、最初に事務局から説明があったのは、20人のレッスンクラスが2つで40人というのが限度かと、他の学校でもそうであるし、そのあたりかというような御説明がありましたけれども、どうでしょうか。これは、何人募集するかということでしょうか。

(久我構成員)

通常1学級40人が定員ですけれども、40人募集したとして、実際にレッスンを展開するときには何人くらいが適当なのかなというところです。

(眞野構成員)

本当に初歩的な疑問ですが、2年生のときに心が折れました、私はやっぱりこういうことではなくて例えば経済を学びたい、といったときに学校内でカリキュラムを変えられるものですか。

(田中構成員)

変えなくても経済は学べます。3年生で選択すれば良いのです。専門学科だからといって一般の選択科目がないということではないのです。

(眞野構成員)

私は、古典Bだとか現代文がBであること、数Ⅱがあるということ、これは大事だなと思って資料4をみていました。もし、演劇を学んで入り口を彷徨って他の事に目覚めることもあります。

(田中構成員)

高校を卒業する74単位の中の必修科目は、専門学科かどうかに関らず、全部の高校生が最低でも約30単位は履修しなければいけないですから、高校卒業するときは、みんな、どんな学校でも、同じことを学びますから、そこは勉強できます。専門学科ですと少なくとも25単位が演劇に関するもの。あとは、プラスアルファの選択科目は、例えば資料4のAの※3の自由選択などには色々な科目が入っていますから、途中で演劇のプロの道を断念する生徒もたくさんいるかもしれませんが、その生徒たちが高校生として、一般の高校生と全く違う世界に嫌々生きるのかというところではなくて、演劇はもちろん学び続ける部分がありますけれども、他の学科の生徒と同じ共通科目はたくさん取れる状況ではあると思います。

(眞野構成員)

心配したのは、例えばBの学校なんかは舞台芸術入門などの科目がありますが、これを一般科目に自分で変えられるのかどうか。

(田中構成員)

25単位取らなければいけないので、それは変えられないです。専門学科である以上、25単位は専門科目を取らなければいけない。

(眞野構成員)

演劇を学び始めたけれども、演劇を学んでいくうちに、興味の対象があつちに飛び、こっちに飛びというような、ということはよくあることだと思うのです。そういうふうになったほうが面白いと思います。普通学科の生徒がこちらの学科の科目も取れるというような、大学みたいなことができる、それは内容の話なのかもしれませんが、少し余談で聞いてみたのです。

(久我構成員)

同じような心配は私もすこし頭をかすめたのですけれども、工業高校にしても、商業高校にしても、専門学科はやはり同じようなスタイル、あとは中に入ってちょっと違うかなと思う人もいるかもしれませんが、共通の科目はきちんと学んだ上で皆さん卒業していきます。ただ、演劇に関してはそういうところとはちょっと違う特殊な部分があるから、少しエスケープルートも考えておいた方が良いでしょうというような特殊性があるのかは、ちょっとわかりません。

(眞野構成員)

エスケープルートというよりは、発展的ルートですよ。逃げているわけではなくて、早い子は2年でわかってしまう、というような。自分を確立してしまう子がいるかもわからないのですよ。自己を持ってしまってもわからない。そういう生徒たちがまた履修しなければいけないのかなと思っただけです。

会長 (能祖構成員)

1レッスンの規模に話を戻させていただけると。世の中的には20人が限度だとよく言われていますけれども、もちろんレッスンの内容によるでしょうけれども、特に実技系に関しては20人が限度だという認識でよろしいでしょうか。

(荒木構成員)

私の学校でもいくつかそういった実技系の科目がありますけれども、やはり講師に聞いても20人が限界でしょうということです。昨年度まで3年間、舞台芸術の研究をさせていただいているときに、他都県を見に行かせていただいたときにも、先程事務局からお話あったように、最大で25人、あるいは20人が限界なのかと思います。

(堀江構成員)

青少年センターの経験でも20から25人のようですね。それ以上になると、芝居塾などを見ていると、アシスタントを相当つけないといけないですよ。そうすると先生の数の問題にもなってしまうかと思います。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。全体を通して、何か御意見なり、今日の議論の感想なりございましたら伺いたいと思いますが、よろしいですか。ありがとうございました。それでは、第2回の協議会を終了させていただきます。